

① 2016年(平成28)8月に、障がい者施設で、元職員により大量殺害される事件がありました。一度に19人も人が殺害されるといふ事件は、戦後最大で日本近代史の中でも津山32人殺しに次ぐ殺人事件です。

この事件自体が怖ろしいことであるのは当然ですが、それ以上に、強く僕の心に突き刺さったのは、この事件の犯人に共感する人々がいるということでした。共感しないまでも、漠然と「殺された人たちは可哀想だけど、生きていてもしかたないのだから、むしろよかったのかも」しれない」といふ思いを抱く人が、けっこう多いということです。

殺された障がい者の家族も、今回の事件で被害者が名前の公表を断った理由として、「この国では、全ての命はその存在だけで価値がある」といふ考えが当たり前ではないので、とても公表することはできません」(毎日新聞、2016年8月6日)と、日本で優性思想が根強いことを伝えていきます。

この事件についてマスコミでは事件の衝撃やネット上などに共感する発言があると伝えられたものの、そうした発言の根底にある価値判断にまで深掘りしたものは少なかつたと思います。□には出しにくいけれど、障がい者は生きていても無駄じゃないか、そんな思いを持つ人が多いのだと思います。そうした思いを完全に否定しきれない人は少ないのでしょうか。犯人の男

③ わつたときに、それまでの環境で押さえつけられてきて芽が出なかつたものが、新しい環境に対応して大きく成長するようになる。あるいは、新しいエネルギーの循環を生み出してその主役になる。それまでデカイ顔をしていたものが潰れて、そのあとに入れ替わっていくのです。これが自然の原理であり、宇宙の原理であり、この世に存在するものの宿命です。

よく、生命の世界も人間の世界も「弱肉強食」といわれます。これは、間違いです。「弱肉強食」ではなく「適者生存」です。つまり環境に適応した者が結果として強者になっていくのです。ただし、いまの環境に適応すればするほど、新たな環境への適応力は弱まります。恐竜の絶滅もそうして起こりました。いま人類も人間社会も危機に直面していると、現代の思想家や科学者が警告を発するのにも、そうした原理に基づいているからです。

ひと言でいえば、この世界に「いらぬ人間なんていない」といふことです。いま弱者とされている人々の中に次の時代を切り開く種があるといふことです。例えば、彼らが生きつづいてとされる立場で、生き甲斐や充実感、生きる喜びを見つげることができたら、その営みの中にみんながよい人生を送るのに役立つヒントがあるはずですよ。彼らが予想もしない力を発揮することを知れば、彼らを劣った存在だと簡単に保護する対象といつかづつに見ることができなくなりそうです。そして、彼らを含めみんな共働、共生、共鳴、共感することが必要だと知るでしょう。それが、僕たちが未来に向けて生き延びる道なのです。

彼らは「可哀想な人々だから生かしてあげる存在」ではありません。「彼らも含めたみんな

② は、そうした思いをエスカレートさせ、「人はどんな状態でもよいから生かしておくべきなのではないか?」という問いを投げかけてきた。そして、「自分のことが自分でできない人を、そんな存在はもういらぬ。そこにお金をかけてケアをしている社会福祉の行政の仕組みの中で、自分はこんなに大変なんだ」と結論を出して殺害を強行し、命をポンポンと消していって。それに同調するかのよう、「犯人はよくやった」「障がい者は死んで当然」「生きていてもしょうがない」といふ共感が起きたわけですよ。

そんな考えに対して、僕はまったく違つと言います。「まだ、そんな考えをしているの?」と言いたい。「障がい者を含めていまの世の中で生きつづらさを抱えている人たちこそ、次の時代の問題点や解決方法を伝えるためにやってきたメッセンジャーであり、大切な存在なんです」と言いたい。

一般に、障がい者や弱い立場に立つ人と一緒に生きていくため、社会的な援助や相互扶助をするのは、功利主義的な文脈から、誰もがいつそいつう立場になるかわからないという保険的な意味合いが強いのだと思います。アメリカの哲学者ジョン・ロールズの「無知のヴェール」による正義論につながる考え方です。しかし、僕は、障がい者や弱い立場に立つ人はむしろ積極的な意味合いを持つ存在だと思つたのです。

そもそも、自然界や生態系は多様性に満ちています。人間世界も多様性があつたほうがよいのです。なぜか? 世界は想像もしていないような変動が起きる。そうした環境が大きく変

④ があるから、僕たちは次の環境でも生きていけるのです。この四、五〇年間、生き方を変えよう、社会を変えよう、世界を変えようという試みが少しずつ行われてきています。障がい者福祉も少しずつ充実してきましたし、持続的に新しい生き方がうまくなっていく例もあります。道は見えているのです。もつとも、まだまだ世の中の価値基準では評価されていません。人間すべてに価値があることの意味が浸透していない。それが、障がい者施設の事件で示されたというわけです。

この考え方にまだ納得できない方もいるかもしれませんが、例えば僕らの新得共働学舎では、自閉症の子どもの500円玉貯金がきっかけでチーズ製造の本格的な研究施設ができて、とうとう世界グランプリのチーズができてしまった。おかげで、僕らは「自労自活」で生きていくことができるようになったのです。障がいがあることによつて、予想もしない生き方が拓かれたのです。

新得共働学舎の40年間はそうした試みの連続でした。本書で紹介するのは、これまで実践してきた、共働、共鳴、共生、共感のやり方です。これらは次の時代の生き方であり組織運営のノウハウです。だから、現代に生きる人々みんなの参考になると確信しています。